地球規模で考える都市の新たな見方

樋渡　彩（建築学科）

動く大地、住まいのかたち――プレート境界を旅する　/中谷 礼仁著

岩波書店 2017 年 3 月

本書は、プレートの境界に沿って旅をしながら、そこに形成された都市・集落を比較するというこれまでにない新たな見方を提示した都市比較論である。特筆すべきは、1 年にも満たない短期間に 1 ヶ月ほどの旅行を 4 回行い、東南アジア、南アジア、中東、南欧、北アフリカに至る広い地域を精力的に現地踏査している点である。プレート境界の特異な自然条件のなかで人々の逞しい営みが生んだ固有の建築の形や都市の特徴を、そして、その土地の持続する暮らしや共有される歴史の記憶を記述している。

著者自身は、実際にプレートの境界に位置する各都市を訪れた時の感動により、その実践力から学ぼうという気持ちを強めていったという。この一連の旅を実現するには、相当なエネルギー、費用、時間という高いハードルがある。それを著者は、計り知れない好奇心によって難なく超えてみせた。こうして生まれた本書は、未知なるものを発見する喜びやワクワクする体験の大切さも教えてくれる。

本書は次の 5 本の柱からなる。

Ⅰ　Building hood への気づき　インド、ネパール

Ⅱ　建築の父、建築の母　イラン

Ⅲ　石の重さ　ギリシア、マルタ

Ⅳ　グローバライゼーションとつきあう方法　トルコ、イタリア、シチリア、チュニジア、モロッコ

Ⅴ　人間の場所　インドネシア

具体的に内容を見ていくと、例えば、「Ⅳ　グローバライゼーションとつきあう方法」では、イタリアのシチリアが取り上げられている。イタリアは、地震の多いことでも知られている。1693 年の地震ではノート、ラグーザなどシチリアの南西部が大きな被害を受けた。ノートは新天地にニュータウンをつくり、見事なバロック都市が誕生した。一方、被害を受けたもともとのノートの町は現在、廃墟化して残っている。本書は 1968 年の地震に襲われたポッジョレアーレをも取り上げ、その復興の背後にあるマフィアの存在にも言及している。

このようにプレートの境界を訪れ、その場所固有の環境条件のもとで古来、人間が知恵を働かせていかに暮らしてきたのかを自分の目で観察し導かれた独自の考察を、試論として刺激的に書き綴っている。地球規模で俯瞰した大きな視点から建築、都市を捉えることで、文明と人間の営みを見直す新たな発見が生まれるというメッセージをこの本から受け取ることができる。

Google earth で位置を確認しながら本書を読むことで、コロナ禍で世界旅行が難しい現在においてでさえも、その土地の理解がより深まるだろう。